

植民地期慶尚北道における学校「普及」と地域

——金泉高等普通学校の設立をめぐる動きを中心に

古川 宣子

はじめに

1931年5月、慶尚北道金泉郡に中等普通教育機関である私立金泉高等普通学校（以下「金泉高普」と略）が設立された¹。高等普通学校は、朝鮮総督府の学校「普及」政策の中心に据えられた普通学校（官・公・私立）修了後に進学する学校として、5年間の中等普通教育を行い、その後高等教育機関である専門学校や京城帝国大学予科に接続する学校である²。

1935年に行われた学校設立者崔松雪の銅像除幕式には呂運享が参席し「慶北のオアシス」と祝辞を述べた学校であった。この学校は、植民地末期の1942年に校長である鄭烈模が朝鮮語学会事件に関係していたとして逮捕された後、公立化され日本人校長が赴任するなどしたが、1945年の「解放」を経て現在も地域の伝統校（金泉中・金泉高等学校）として運営されている。

金泉高普に関連する研究としては、学校設立が可能となった資金30万円余りの拠出を行った崔松雪に焦点を当てた、金鎬逸「崔松雪堂の教育理念と教育活動」・金亨陸「崔松雪堂関連資料の分析と展望」・金喜坤「崔松雪堂（1855～1939）研究」などの成果が出されている。また、崔松雪は1922年に『崔松雪集』3巻を発刊するなど、文人としても活動しており、その文学活動について現在韓国では研究書や博士論文なども出されている人物である。同女史は、金泉で1855年に生まれたが、39歳からは京城在住となり、学校設置に際して京城の住宅も含め私財をすべて寄付し、金泉にあった「別荘」に1930年から移り住み1939年に金泉で亡くなった。

本研究では、植民地期に金泉高普が設立される過程について、崔松雪の貢献の大きさもさることながら、設立前史としての、1924年に発起人会総会が開かれた「金泉高等普通学校期成会」とその母体となった金陵青年会の活動に焦点を当てて分析する。地域でどのように中等教育機関の設立運動が展開されていったのかを明らかにすることにより、植民地下朝鮮人の教育要求の所在について解明する一助としたい。なお考察に当たっては、こうした運動の前提・根拠となる、地域における初等学校「普及」状況とその定着の様相に

-
- 1 金泉高普は男女あわせた公私立高等普通学校としては朝鮮全体で41校目、私立男子のみでは10校目に設立されている。
 - 2 女子は、女子高等普通学校と称された。なお、修業年限5年制は第2次朝鮮教育令施行（1922年4月）以後であり、女子高等普通学校の場合は4年・3年に短縮することも認められていた。これ以前は、男子4年制、女子3年制であった（『朝鮮総督府官報』1911年9月1日および1922年2月6日）。
 - 3 金昌謙編『韓国育英事業の母 崔松雪堂』（景仁文化社、2008年）所収。

ついてまず見ていく⁴。こうした方法により、地域レベルでの朝鮮人の中等教育要求について、具体的に明らかにすることができると思う。地域社会における初等学校の一定の「普及」・定着の実態⁵があり、その裏付けの下に、地域の人々の切実な教育要求として植民地下朝鮮人の中等教育機関設立運動が展開されていたことを明らかにする。そのことが本研究のねらいである。

1 金泉郡金泉面の成立とその人的特色

(1) 行政区域——慶尚北道金泉郡金泉面

本節では、学校が設立される基盤としての「地域」に焦点を当て、金泉高普が設立された金泉郡および郡内の各面について、当時の行政区域の変遷の面から概観する。

周知のように、植民地初期の1913年12月に総督府令で地方行政区画の改編が打ち出され翌14年4月から施行された。朝鮮全道では、13道12府317郡4322面が13道12府220郡2531面となり、全道的な郡・面の統廃合の一環として、金泉郡も成立している。

金泉郡は、従来の金山郡(16面)・知禮郡(9面)・開寧郡(8面)の3郡33面と星州郡薪谷面を合併させて新しく成立した郡であり、郡内には20の面が置かれた⁶。慶尚北道全体では1府(大邱府)23郡となったが、金泉郡はその中で、第7位の広さであった。郡人口の点では1928年現在の数値で、朝鮮人約14万人・日本人約2000人・その他外国人151人、合計14万人となっており、道内で5番目に人口が多い郡である⁷。道庁所在地である大邱と金泉は1905年以降京釜鉄道で結ばれており、両者は鉄道で約70kmの距離にあり、一方金泉から京城までは約271kmであった。

金泉面は、旧金山郡金泉面から新しく金泉郡金泉面となって、面は七つの「町」(南山・旭・本・錦・城内・黄金・大和)で構成され、金泉郡庁が置かれたのはその中の南山町であった。1917年には道内で、浦項とともに金泉面も「特別指定面」となった。特別指定面は、朝鮮人と日本人が多数混在する地域でその状況が「府に近い面に限」られ、面長には日本人を任命できた。当時2512面中で1%に満たない23面のみが指定された。金泉は京釜線沿線で多数の日本人が居住する場所として指定されている⁸。さらに、1931年4月から施

4 研究史的には、全道レベルでの普通学校への就学要求については一定の蓄積がされてきており、一方で、日本側の教育政策が中・高等教育を軽視するものであったことは定説になっている。

5 ただし、義務教育が実施されなかった朝鮮において、就学者が一部にとどまったことはいうまでもない。筆者の推計では、統計上把握できる最終年である1943年の公立普通学校就学率は、男子61.8%・女子29.4%であった(古川宣子「植民地近代社会における初等教育構造——朝鮮における非義務制と学校「普及」問題」駒込武・橋本伸也編『帝国と学校』昭和堂、2007年、155頁)。

6 越智唯七『新旧対照朝鮮全道府郡面里洞名称一覧』(1917年)12頁。なお、金泉郡の面積は「65.55方里」(慶尚北道編纂『自大正8年至昭和3年 慶尚北道統計年報』1930年)となっており、1里が約3.9kmであるから、998.6km²となる。どの程度の広さであるかをイメージするために仮に正方形で考えると、31.6km(8.1里)四方ほどの広さになる。各面の広さも、20面でその平均値をとると、1面は約50km²、約7.1km四方ほどであった。

7 同上、『自大正8年至昭和3年 慶尚北道統計年報』。

8 孫禎睦『韓国地方制度・自治史研究(上) 甲午更張～日帝強占期』(一志社、1992年)167頁。